

源氏物語手鏡

清水好子
森一郎
山本利達



新潮選書

時は千年前、作者も読者も作中人物もすべて貴族社会の人々で、今の私たちには縁遠いことばかりだが、生きてゆく条件の違いを理解して『源氏物語』に向うなら、作者が書き続けずにいられなかった問題が、今なお私たちのものであることに気づかれよう。『源氏物語』は、読み返すたびに新しい意味が見出されるというのは、作者と私たちを隔てる充実した距離のせいである。遠い道のりを、見ぬ世の友に近づくために、本書は編まれたのである。



日文 701483090

115165

源氏物語手鏡

清水好子
森 一 郎
山 本 利 達



新潮選書

げんじものがたりてかがみ
源氏物語手鏡 〈新潮選書〉

© Shinchosha, Printed in Japan, 1975

昭和五十年四月二十五日 発行
昭和五十年十月十五日 三刷

定価 七五〇円

著 者 清水好子
もり ひとこ
森 一朗
やま もと

山本利達
やま もと

発行者 佐藤 亮一

印刷 株式会社 金羊社

製本 共同製本株式会社

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

電話業務部 〇三二六六―五一一
編集部 〇三二六六―五四二

振替 東京四一八〇八番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

はじめに

一、この『源氏物語手鏡』は、もと円地文子訳『源氏物語』を読む人の理解をたすけるために執筆し、全巻購読者に頒布されたものである。その後、本書を入手したいという読者の要望もあり、また本書が『源氏物語』を読むためだけでなく、一般に平安期の貴族社会、その生活などを知らうとする人達への解説的読みものとしても役立つと考えるので、部分的な訂正を加えて、ここに新潮選書として刊行した。新版を出すにあたって『源氏物語』についての簡単な紹介を付した。

一、本書は、ほぼ千年の時の隔たりを経た現代では理解しにくい平安朝の風俗、習慣、制度、あるいは『源氏物語』の時代と背景等を説明することを目的とした。しかし、辞典のような形をとることは避け、全体を通して読める形に執筆したので、必要な事項をすべて網羅することができず、割愛せざるを得なかった事項もある。また、説明上、重複した箇所もあるがそのままにした。

一、右のような方針で執筆したが、辞典風に使用する場合も考慮して、本文で説明を施した主要な事項は、その部分をゴチック体にした。また巻末に事項索引を付けて検索できるようにした。

一、『源氏物語』の登場人物の呼び名は通称のものに従った。また官位の昇進等により、登場人物の呼称が変る場合があるが、統一しなかった。

一、本巻に引用の『源氏物語』の訳文は円地文子訳『源氏物語』（新潮社刊）によった。

目次

はじめに 一

源氏物語の時代と貴族社会 清水好子 二

I 貴族社会の構造 三

源氏物語の世界 時代の設定 女御・更衣 皇后の座

女院 准太上天皇 宫廷政治家 摂関政治 中央の官

僚 地方の官僚 大貴族の家臣 政治家としての光源氏

都の治安と武力 私兵

II 親子・血縁 三

王朝貴族の価値観 姫君を産む 女の血筋 紫の上の意

味 母の地位 養子 不義の子供たち 血の神秘

家風 政治家と父親と

Ⅲ 宮廷に生きる女房たち…………… 四

姫君の生活 女房 女房の呼び名 乳母 情報網とし
ての女房 恋の仲だち 宮廷のみやび 清少納言の女房
論 源氏物語の女房 紫式部の女房意識 女房勤めの有
利さ

Ⅳ 王朝の文化人たち…………… 六

源氏物語に描かれた文化人 歴史上の文化人 専門家否定
学者の社会的評価 紫式部の学問観 僧侶の立場 僧の
社会

平安貴族の生活…………… 森一郎…………… 三

Ⅰ 誕生から死まで…………… 七

誕生の祝い 袴着 元服・裳着 婚儀 病 老年

死 葬儀

Ⅱ 信仰と生活

宿世の思想

無常観

阿弥陀信仰

天台宗

法華經

加持・祈禱

末法思想

神道

陰陽道・宿曜道

Ⅲ 男女の交際

垣間見

恋の手引

懸想文

結婚

女房の立場

Ⅳ 生活の中の遊び

余暇のいとなみ

音楽

雅楽の曲名

東遊

神楽

踏歌

絃楽器

管楽器

打楽器

絵画

室内娯楽

室外娯楽

Ⅴ 日々の暮らし

束帯 直衣

狩衣

衣裳製作

裳唐衣

小桂

壺装束・大桂

出し衣

食生活

暮しの諸事

源氏物語の舞台と背景……………山本利達……………一六

I 四季の移ろいと行事……………二五

四季のたたずまい 曆・時刻 年中行事 一月―齒固・
白馬の節会 除目 踏歌 賭弓 内宴・子の日 二月―季の
御説経 三月―臨時祭 四月―更衣・賀茂祭 五月―騎
射 六月―大祓 七月―七夕・相撲 八月―除目 九
月―重陽の宴 十月―更衣 十一月―五節 十二月―御
仏名・追儼

II 貴族生活と財政……………二六

貴族の邸宅 貴族と莊園 牧場の私有 貴族の給与
御封 一般の給与 年官・年爵 贖勞 天皇の家政
貴族の家政 家司 隨身・資人

III 教養と学問……………二八

IV

都城と住まい

都の町並

平安京

貴族の屋敷

左京と四条以北

四条以南

左

衛門府

朱雀院

冷泉院

大学寮・教倉院

鴻臚館

市場・東寺・西寺

寢殿造り

寢殿造りの配置

寢殿

寢殿の構造

部屋を仕切る

几帳

敷物

御帳台

部屋の設備

厨子

室内照明

廊・渡殿

遣水

対

釣殿・泉殿

雑舎

宮城の中

八省院

近衛府・兵衛府

馬寮

内蔵寮

楽所・絵所

雅楽寮

紫宸殿

宜陽殿

左近の陣

藏人所

弓場

殿 右近の陣

作物所

清涼殿

滝口

後涼殿

女の教養課目

女と漢詩文

習字

作歌

音楽

女

の起居振舞

姫君の教育者

男の教養課目

官吏養成機

関

明経道・紀伝道

大学の諸規定

擬文章生・文章生

省試

官吏への道

貴族と漢詩文

有職家

仁寿殿・内侍所 後宮七殿 弘徽殿・承香殿・麗景殿
後宮五舎 藤壺・梅壺・桐壺

V 都の外……………三九

都の周囲……………三九

都の東部 都の北部 都の西部 宇治への道

物語……………三四

都の外へ出る機会 石山寺 石山寺への道 初瀬への道

長谷寺 住吉神社

任地……………三九

中央と地方 私交通の発達 源氏物語と地方 大宰府の

役人 筑紫から都へ

源氏物語について……………清水好子……………三五

図版目録……………二四八

索引……………二四七

源氏物語手鏡

源氏物語の時代と貴族社会

清水好子

I 貴族社会の構造

源氏物語の世界

『源氏物語』の理解のためにこの一章が設けられたのは、『源氏物語』が言葉に表わして書こうとしたものが、権力の働く場である公の世界に鋭く対立し、そのことによって、おのれの意味を明らかにしてゆこうとしたからである。それは女の愛の問題である。この物語は、女が、女のために、女の世界を書いたものといわれるが、それが確かな手応えを持つためには、反対の極にある公の世界なるものを知っていなければならぬ。男女の差別がすでに確立していて、女の読む物語は読み捨ての娯楽物のように軽く考えられていた時代の、上流階級のお姫様の読物が、今も心を打つのは、作者が、かかる構図を念頭に置いていたからにほかならない。

まず、この物語の主人公をはじめ、主要な人物がすべて十世紀の日本の支配者の家族であることに、すでに作者の意図の一端がうかがわれよう。さらに、主人公が天皇家の子孫であるのは、『宇津保物語』『落窪物語』などから受けつがれた物語のきまりだと説明されてきたが、『源氏物語』では、形の上で同じ約束が守られているにせよ、そのことに作者が与えた意味は格段に違っている。このような、最高の支配者である貴族たちの生き方や心情を理解することは今日の大部

分の読者にとつてたいへんむずかしい。私とても十分説明できるとは思われないが、彼らの政治や制度との結びつき、彼ら同士の関係や、それらを可能にしている条件などを、この物語とのかわり方に基づいて取り上げてみたいと思う。

時代の設定

『源氏物語』のはじめの時代は、歴史上の醍醐天皇の在位時代（八九七—九三〇）にあたる。それは作者が桐壺の巻に実在の天皇の名を二度も挙げていることによつて、明らかである。「亭子の院の長恨歌の御屏風」と「宇多の帝の御誠め」というところである。亭子の院、宇多の帝ともに同一人で、仁和三年（八八七）から寛平九年（八九七）まで帝位にあった宇多天皇のことである。醍醐天皇に位を譲つたあと、上皇として亭子の院や宇多の院などの別荘に住んだ。上層階級の人々は、実名で呼ばず、住居や地位で呼ぶので、宇多天皇を亭子の院と呼ぶ。讓位にあたって醍醐天皇がまだ十三歳の年少であつたため、天子の心得を述べた訓誡を書き与えた。現在でもその大部分を見ることができる「寛平の御遺誡」である。宇多天皇在位時代の年号を寛平といい、天皇を呼ぶのにその年号を以てすることがあるので、「寛平の御遺誡」はすなわち、やわらげていえば、物語本文にあるように「宇多の帝の御誠め」ということになる。桐壺の巻の桐壺帝は、その教えに従つて、外国人を宮廷に入れなかつたというのだから、どうしても醍醐天皇と考へぬわけにはゆかない。また、長恨歌の屏風も、宮廷の公式の御殿にあるのではなくて、天皇の居間に日常調度品として置かれている。そのようなものは「寛平の御遺誡」のように、正式の歴史には書かれないから文献の上で証明はできないけれども、宇多天皇が注文して作らせた日常の道具を身辺から離さない天皇というのは、宇多天皇の御子と考へるのが自然である。桐壺の巻の冒頭に「いつの御代のことであつたか」と、わざと時代は明示せず、不定な言